十和田市郷土館所蔵品が語る十和田市の歴史

縄文時代の十和田市

注口土器
（ちゅうこうどき）

高坏形土器
（たかつきがたどき）

岩偶（がんぐう）

岩版（がんばん）

明戸遺跡出土品（縄文時代晩期）

・十和田市に人が住み始めたのは縄文時代早期（約9000年前）からとされています。

・縄文時代は１万年以上続いた時代で、人々は狩（かり）や漁（りょう）をしたり、木の実をとって暮らしていたと考えられています。

・市内でも川ぞいに128か所の遺跡が確認されており、発掘調査により寺上遺跡、明戸遺跡、中里（２）遺跡等でムラの跡が確認されています。

弥生時代の十和田市

甕（かめ）形土器　　石斧（せきふ）

中里（２）遺跡出土品

壺（つぼ）形土器

姫居遺跡出土品

・弥生時代（約2300年前～約1700年前）になると青森県でも津軽地方で稲作がおこなわれたことがわかっていますが、県南地方ではよくわかっていません。遺物から縄文時代と同じような暮らしをしていたとも考えられています。

・市内では、中里(2)遺跡でムラの跡が発見されたほか４か所で遺跡が確認されています。

古代の十和田市

土師器（はじき）
切田前谷地（２）遺跡出土品

須恵器（すえき）
沼袋遺跡出土品

鉄製農具
上段：くわ、下段：かま
市内各遺跡出土品

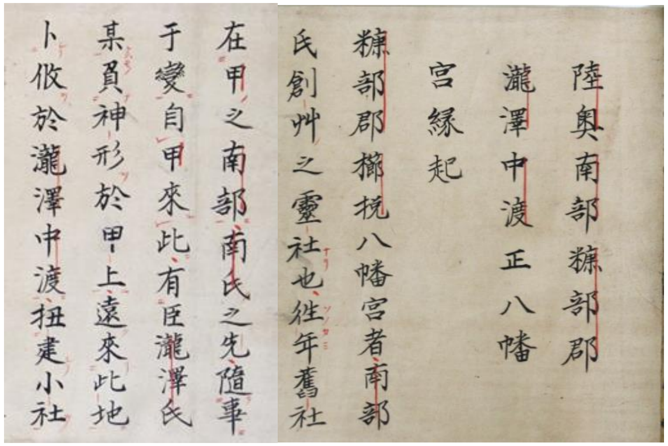
墨書（ぼくしょ）土器
六日町遺跡出土品

・古墳・奈良・平安時代(約1700年前～約800年前）の青森県は、天皇を中心とした国家の支配が及んでいない地で蝦夷（えみし）とよばれる人々が住んでいたとされます。一方、当地方でも農耕や鉄器の使用が一般化していきます。

・市内でも多くの遺跡がみつかっており、大和田遺跡や六日町遺跡、切田前谷地遺跡などでムラの跡が調査されています。

中世の十和田市

城館出土の陶磁器・銭貨
切田前谷地（１）遺跡出土品



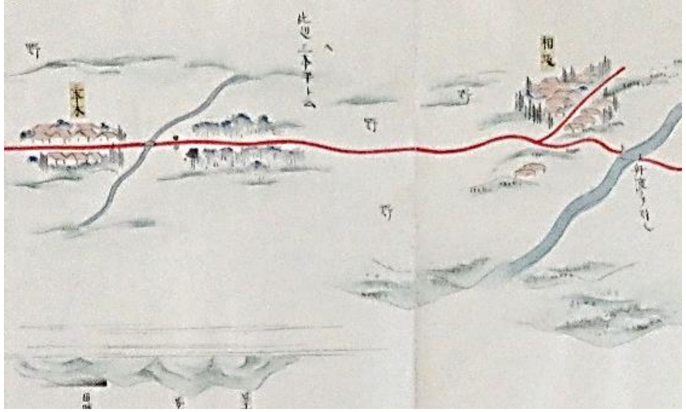
陸奥南部糠部郡
瀧澤中渡正八幡
宮縁起
糠部郡櫛挽八幡宮者南部
氏創州之靈社也往年舊社
在甲之南部南氏之先隨車
于變自甲來此有臣瀧澤氏
某員神形於甲上遠來此地
卜依於瀧澤中渡扭建小社

中渡正八幡宮縁起
（製作は江戸時代、滝沢家伝世品）

・中世の当地方は糠部（ぬかのぶ）と呼ばれ、鎌倉時代は北条氏の所領となっており、室町時代以降は南部氏が台頭します。

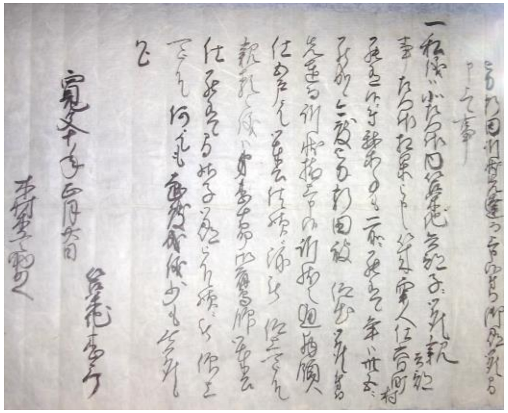
・当市にも奥瀬氏、切田氏、滝沢氏、洞内氏などの武将が住んだとされ、各所に城館跡が残されています。また、現在でも信仰されている中渡八幡宮、切田八幡宮、法蓮寺などの寺社等もこうした武将達によって建てられたと伝えられています。

近世の十和田市



奥州街道の絵図
（北奥道中図）

兜（かぶと）
苫米地家伝世品



新田開発関係文書
苫米地家史料

鐙（あぶみ）
畑山家伝世品

・当地域は江戸時代（約400年前）になると盛岡藩の支配を受け、「郡」-「通」からなる地方行政区が整備されていきます。

・市内北部の村は北郡七戸通（七戸代官所）、市内南部の村は三戸郡五戸通（五戸代官所）に属しました。

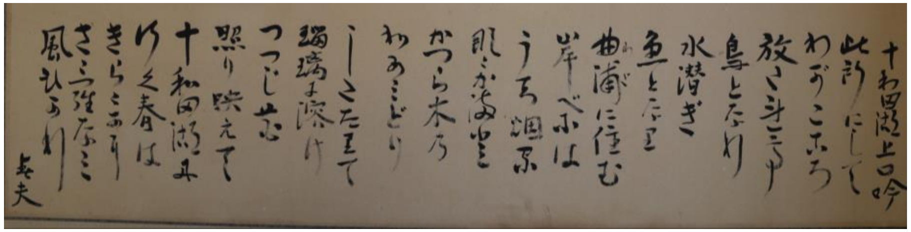
・給人（きゅうにん／在地の武士）による新田開発も進められましたが、寒冷な気候から稲作に適さず、大豆など畑作や馬産が主要な産業でした。

近代の十和田市

「青森県陸奥国上北郡三本木村」図

軍馬補充部正門写真

バオリ



十和田湖上口吟（佐藤春夫書）

・江戸時代の終わりにおこなわれた新渡戸氏の三本木原開拓を契機として、荒野とよばれた三本木原は徐々に水田地帯となっていきます。また、この開拓により生まれた三本木の「新町」は、陸軍の軍馬補充部（ぐんばほじゅうぶ）の設置などを経て、上北地域の中心都市として大きく発展していきます。また、信仰の地であった十和田湖は文人大町桂月（おおまちけいげつ）の紹介等を契機として国内有数の観光地となっていきます。